# 卒寿翁日誌

# もう 5、6 年生きたい

# 何のために　誰のために

# Diary During Hospitalization by MUNAKATA Kuniyoshi

宗片邦義

MUNAKATA Kuniyoshi

2026 年

7 月 31 日　熱海、海の見える病院に午後入院。

8 月　2 日　体温が 39,1 度。（よく覚えていない）

8 月　3 日　老後の歩けなくなってからの人生が、もうひとつあるということを知った。
人生がこうも急転回するものか。不覚だった。
堅い畳の上に、ドスンと尻もちをついただけで激痛が走り、立ち上がれなくなってしまった。これがこの世なんだとひしひしと感じる。

8 月　5 日　目が覚めた　朝６時半
静かな朝
鳥の声もしない

生きることはつらい
身体も心も
それでも　生きたいと思う
なぜだろう

子供の頃から
ほぼ自然食で通してきた
肉食せず　といって魚は大好き
「私の中で　生かして　あげよう」

海岸で育った
海も空も大地も
生きているのではないか

出来る限り　自然に生きたい
薬とか　不自然なもので調節せず
自然の一部として
大自然の一部として　生きぬきたい

8月　8日　いつの間にか消えてしまった青空
早く歩けるようになりたい
ひとりでも生きられるようになりたい
91歳、、、それは無理か

オンザロックが好きだ
昼は生ビールの、夜は日本酒の

しかし、ここではアルコールは飲めない
ケミカル上のことだろうか
患者の個別の状況を理解してくれる
患者中心の医師がいてくれるのはありがたい

自らの研究熱心な医師以上にありがたい
それは本来の研究者なのではないか

8月10日　「届いたよ」
高校の同級生（水原氏）が甘酒を送ってくれた
電話では「ラブレターと一緒に」と言っていたが
それはない、、、ありがたい、、、友情に感謝

ながながと話すと
もう誰も聞いていないからね
簡潔に大事なことを話すんだよ

AIを使えば
誰でもながながと論文を書ける時代になったんだ
「日本人は難しい言葉を好むけど、それはよくない
誰にでもわかるように、話したり書いたりするのがよいのだ」
（永井道雄　文部大臣）